

# 真木草場遺跡

発掘調査報告書

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第35集

## 序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受け、大分県教育庁埋蔵文化財センターが調査を実施した県道新城山香線道路改良工事に伴う真木草場遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する豊後高田市田浜地区は、国東半島の中央部に位置しており、真木大堂や胎蔵寺・熊野磨崖仏等の豊かな歴史と自然に恵まれています。真木草場遺跡の発掘調査では、奈良時代頃から鎌倉時代の遺構や遺物が出土しました。

本書が埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月25日

大分県教育庁埋蔵文化財センター  
所長 福田 快次

## 例 言

- 1 本書は大分県土木建築部高田土木事務所の依頼を受け実施した、真木草場遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は県道新城山香線道路改良工事に伴い、埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 遺構の標記は下記のとおりである。  
溝1～、土坑1とし、通しの遺構番号としてS1～S6までの遺構認定した。
- 4 遺跡の測量・実測・作業員の雇用・重機の手配等については株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、大谷伸宏（技師）、内田賢一（助手）が担当した。
- 5 出土遺物は、すべて大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。
- 6 本書の執筆・編集は綿貫俊一（埋蔵文化財センター）がおこなった。

## 本文目次

序文

例言

第1章 はじめに…………… 1	第3章 遺構と遺物…………… 5
第1節 発掘調査の経緯と経過…………… 1	第1節 溝1（S7）…………… 5
第2節 発掘調査の組織…………… 1	第2節 溝2（S2、第7図）…………… 7
	第3節 溝3（S6、第8図）…………… 9
第2章 遺跡の立地と環境…………… 2	第4節 土坑1（S1）…………… 11
第1節 地理的環境…………… 2	
第2節 歴史的環境…………… 2	第4章 まとめ…………… 13

# 第1章 はじめに

## 第1節 発掘調査の経緯と経過

県道新城山香線は豊後高田市新城と杵築市山香町を結ぶ県道である。沿線近くには国宝の富貴寺を始め、国指定重要文化財真木大堂を中核とする国東半島仏教文化の史跡が多数存在することと、国東市安岐町・杵築市山香町方面へのルートになっていたことから、近年交通量の増加が指摘されていたところである。こうした地理上の重要幹線であることから豊後高田土木事務所では平成16年から道路改良を計画した。大分県教育庁埋蔵文化財センターは年度毎の工事予定地に対し、関係部局と調整を図りつつ、確認調査、試掘調査、立会調査を行ってきた。平成16年度の分布調査の段階では周知の遺跡から外れていたが、付近に国指定重要文化財に指定されている真木大堂が存在することもあって試掘が必要となった。

大分県土木建築部建設政策課から平成17年6月15日付け試掘調査依頼が大分県教育委員会に提出された（建政第397号）。大分県教育委員会はこれを受諾する平成17年6月29日付け通知を県土木建設政策課に提出し、同年8月25日に試掘調査を行った。その結果、調査区の一部から奈良時代の遺構が検出され、発掘調査が必要であることを大分県土木建築部建設政策課に通知した（教委埋セ535-2号）。大分県教育庁埋蔵文化財センターの通知を受けた大分県土木建築部建設政策課は、平成18年4月20日付け調査依頼を大分県教育庁文化課を通じて埋蔵文化財センターへ提出した。埋蔵文化財センターでは平成18年6月26日から同年8月3日までの予定で調査を行うことを文化課へ回答した。

真木草場遺跡の発掘調査は平成18年7月3日に開始し、平成18年8月1日に終了した。

事業主体者 大分県豊後高田土木事務所

調査主体者 大分県教育庁埋蔵文化財センター

## 第2節 発掘調査の組織

埋蔵文化財センター	所長	渋谷忠章
	次長兼総務課長	岡本義博
	調査第一課長	栗田勝弘
	調査一課一般事業担当副主幹	綿貫俊一

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

真木草場遺跡は<sup>まきくさば</sup>大分県豊後高田市大字真中<sup>くさば</sup>草場に所在する。

真木草場遺跡の所在する豊後高田市は国東半島西南部に位置する。国東半島は西側に周防灘、東側に別府湾・伊予灘が広がっている。半島の基部である南側には杵築市山香町が位置し、低い山地と狭小な谷間からなる地形が展開している。国東半島の中央部に休火山の両子山が位置しているが、永年の浸食で放射状の尾根となって延びている。この尾根の間は大小の谷となっており、尾根同様放射状に展開し、小河川が貫流している。

真木草場遺跡のある谷は田洪と呼ばれ、国東半島の中では比較的広い盆地状の谷であり、平地が広がっており、田園地帯を桂川が西流している。真木草場遺跡は川の左岸側の河岸段丘上に立地し、田洪地域の中では谷の東南部にあたる。この地区は2面の河岸段丘がみられるが、真木草場遺跡は上位の第2面上に立地する。桂川と河岸段丘1面の比高差約3m、河岸段丘1面と河岸段丘2面との比高差2.5mとなっている。現在の民家・道路などはこの河岸段丘2面上にある。

### 第2節 歴史的環境

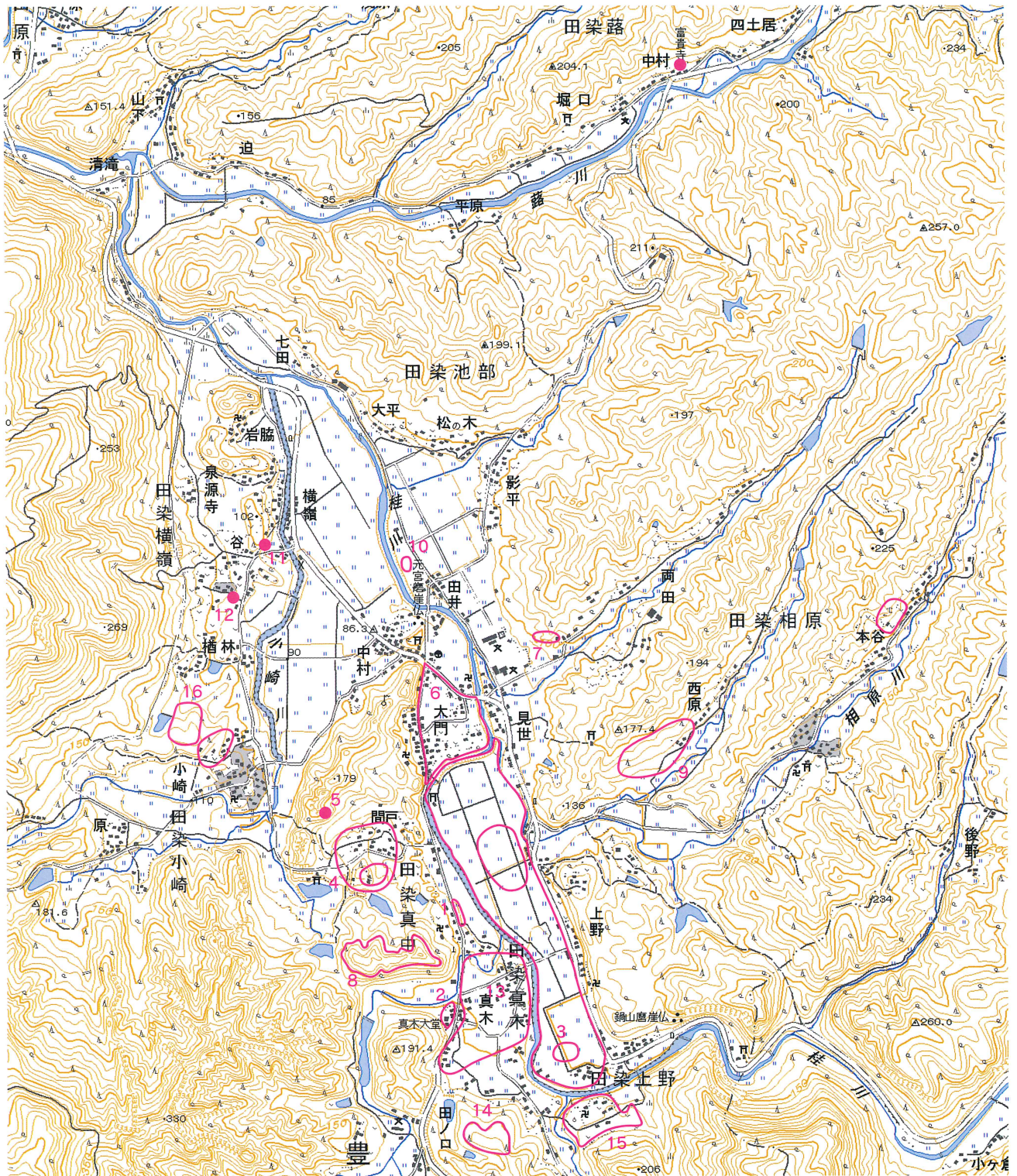
田洪地域に人の痕跡が見られるようになるのは縄文時代後期からで、真木草場遺跡とは桂川を挟んだ河岸段丘上に位置する上野遺跡である。上野遺跡からは鐘崎式土器と呼ばれる土器や姫島産黒曜石を石器の材料として用いた人々の円形の竪穴式住居跡が見つかっている。しかし田洪地区における縄文時代の人々の通時代的な居住痕跡は散発的で明確ではない。

弥生時代になると田洪地区にも人々の居住痕跡がはっきりしてくる。<sup>とばるだい</sup>戸原台遺跡・<sup>うえのじょうり</sup>上野条理遺跡・<sup>おおひら</sup>大平遺跡などがある。戸原台遺跡は弥生時代前期末中期初頭の土器が散布し、上野条理遺跡は弥生時代後期後半の集落跡がある。古墳時代になっても上野条理遺跡では古墳時代前期初頭の集落が引き続いて営まれ、トシノ神石棺遺跡では5世紀代の土師器が見つかっており、周囲に集落跡の存在が予想されている。6世紀代になると田洪谷の中央部に嶺崎鬼塚古墳が造営されているほか、両田には崖に6世紀～7世紀初頭の横穴墓が形成されている。嶺崎鬼塚古墳は横穴式石室を有する円墳で、谷地形の田洪という限定的な空間の首長墓と推定される。

奈良時代には真木草場遺跡と同時期にあたる上野条理遺跡西ノ尻地区で8世紀後半の集落が形成されている。なお当時のことを記した和名抄によると田洪には田洪郷が置かれている。寺伝等ではこの頃、国東半島の六郷満山寺院の開山が<sup>にんもんぼさつ</sup>「仁聞菩薩」であるとの伝承がある。また7世紀の中頃には田洪地区が、宇佐八幡<sup>みろく</sup>・弥勒寺の封戸とされたと考えられ、それらは平安時代に荘園化している。

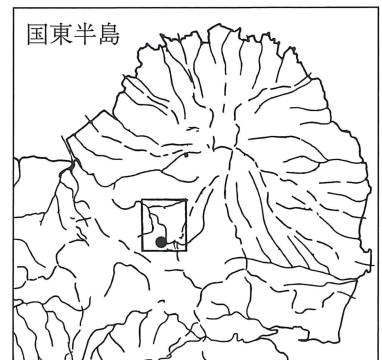
田洪地域が歴史上はっきりしてくるのは平安時代の終わり頃で、仁安3年(1168)に成立伝承のある「六郷二十八本寺目録」によると馬城山伝乗寺(田洪の真木大堂)は既に<sup>こんりゅう</sup>建立されている。この頃から六郷満山寺院が田洪地域など国東半島各地に形成されつつあったことが推定される。また鎌倉時代になって、関東武士である大友氏の下向を背景として、その代官小田原氏が田洪地区を押領する。しかし南北朝期以降は大友系田原氏が田洪地域で力を延ばすが、分家である田原氏の勢力増大を懸念した大友宗家との対立から田原氏は戦国時代に没落し、代わって大友宗家・吉弘氏がこの地の覇権をもった。田洪周辺にはこの頃の山城が点在しており(大久保城・牧城)、往時の緊張を今に伝えている。

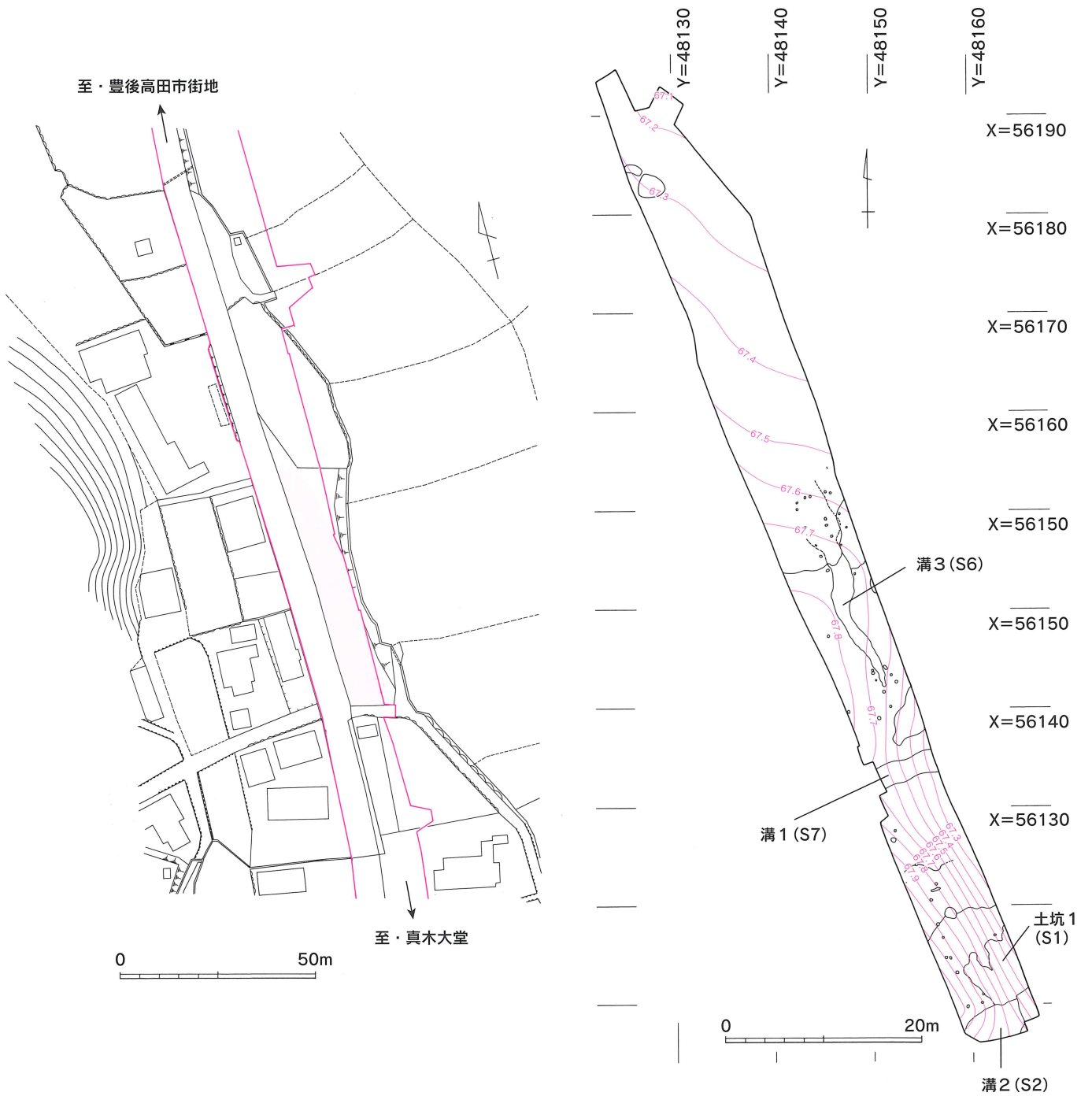
安土桃山時代の末に朝鮮出兵時のミスから大友氏が没落し、文禄3年に豊臣秀吉が豊後を小藩に分割し、田洪は竹中重利が領有した。その後、慶長6年に細川忠興領、江戸時代に入って松平氏、天領と支配者がめまぐるしく代わっている。



第1図 真木草場遺跡と周辺の遺跡・史跡

- |               |           |
|---------------|-----------|
| 1 真木草場遺跡      | 10 トシノ神遺跡 |
| 2 真木大堂        | 11 上屋敷古墳  |
| 3 上野条里遺跡西ノ尻地区 | 12 嶺崎鬼塚古墳 |
| 4 旭遺跡・間戸寺     | 13 伝乗寺跡   |
| 5 穴井戸洞穴       | 14 牧城跡    |
| 6 戸原台遺跡       | 15 中尾遺跡   |
| 7 両田横穴墓群      | 16 野地台遺跡  |
| 8 大久保城跡       | 17 上ノ平遺跡  |
| 9 亜原遺跡        |           |



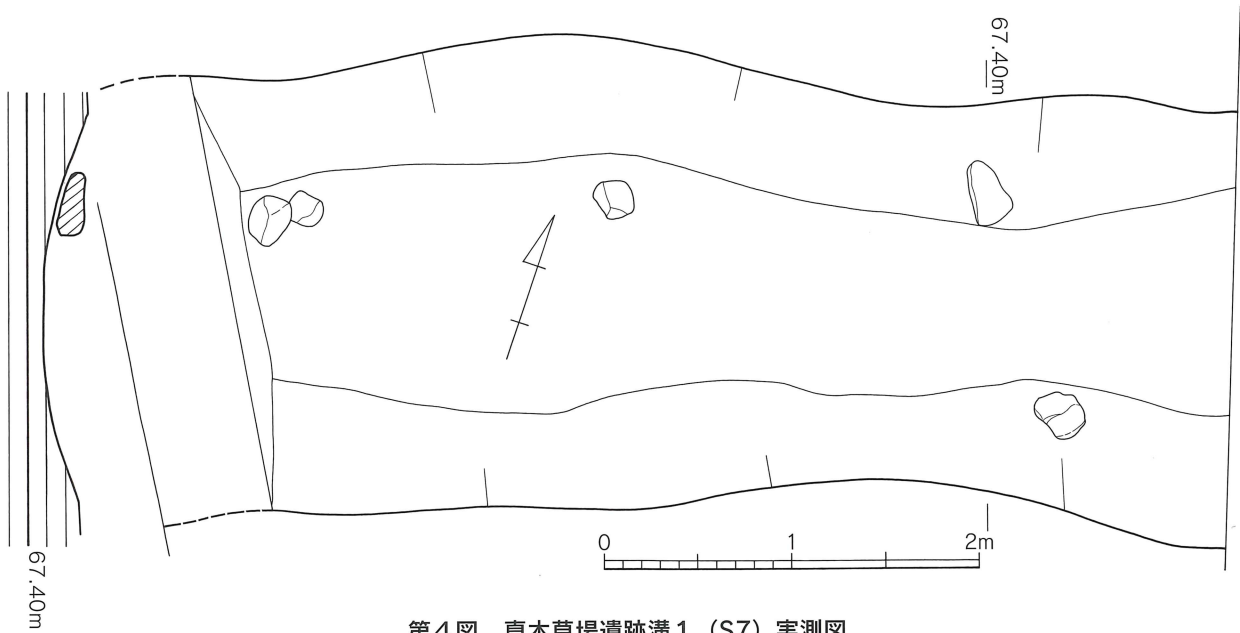


第3図 調査区の位置遺構配置図

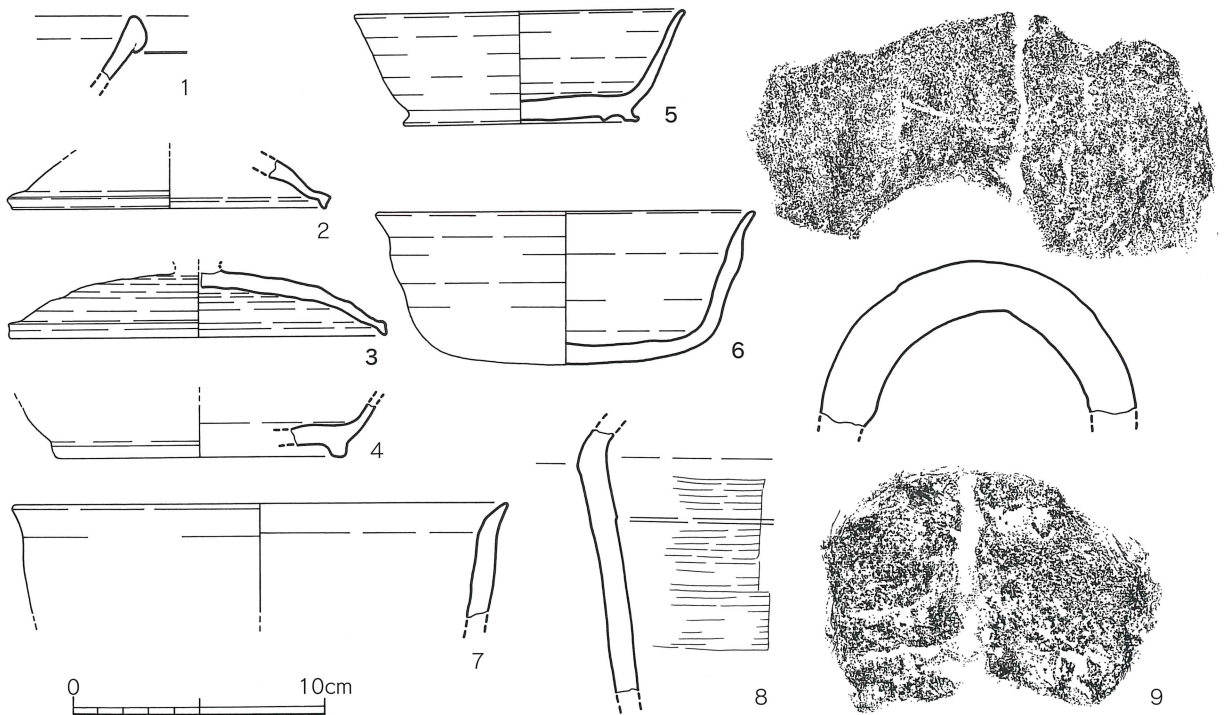
### 第3章 遺構と遺物

#### 第1節 溝1 (S7)

溝1は南北に長い調査区の中央部からやや南側に直交するように位置している。したがって調査区の西壁と東壁の間の550cmを調査対象とした。溝1は現状で幅が250cm、深さ20cmと比較的浅い溝である。立ち上がりは緩やかである。溝底部は西側で標高67m35cm、東側で66m95cmであり、その比高差40cmと東側が低い。これは



第4図 真木草場遺跡溝1 (S7) 実測図



第5図 真木草場遺跡溝1 (S7) 出土遺物実測図

西から東へ下がる地勢と関連するもので、地形からみて調査区北側の段丘崖まで延びるものだろう。なお溝内の底部外よりに点々と2, 30cm前後の石を配置している。内部の土壌はほぼ一枚の黒色粘土層で、炭粒や焼土粒がかなりみられた。

遺物は玉縁の白磁が溝上面付近で検出されたほか、須恵器等の遺物は溝内に散漫に分布していた。

**白磁碗**（第5図1） 僅かに黄色を帯びた白磁で、断面が蒲鉾状の玉縁口縁である。

**坏蓋**（第5図2、3） 2は須恵器の坏蓋で、口縁部は屈曲せずにそのままやや尖る端部をもつ。頂部がやや高く丸みを持つ。天井部を欠くが本来は宝珠摘みを有するのだろう。口径は12.3cmである。口縁部が屈曲する。3には宝珠摘みの痕跡がある。

**坏**（第5図4、5、6） 4、5高台は境界付近につく。5の高台は外方に突出する。6は無高台である。

**甕**（第5図7、8） 一例は口縁部を短く外傾させた小型の甕で、内外面ナデ（7）。もう一例は、大型の長胴の甕と推定され、口縁部を外傾させる。外面に横ハケがみられる（8）。

**瓦**（第5図9） 丸瓦の破片で、内外面が風化によって粗くなっており、現状で内面に布目痕は観察できない。色調は黄褐色であり、一見して古代瓦に見える外観をもつ。



写真3 溝1 (S7) 近景



写真4 溝1の遺物

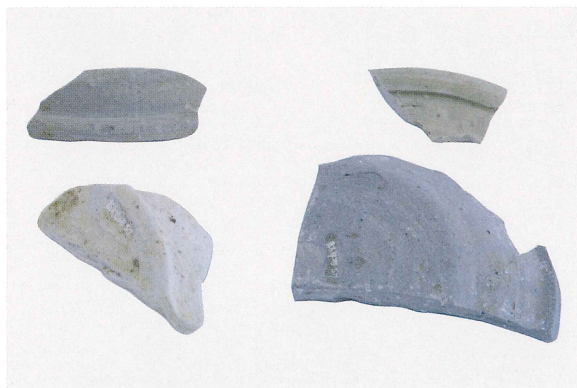


写真5 溝1の遺物写真



写真6 溝1の遺物 (古瓦の内面)



## 第2節 溝2 (S2、第7図)

溝2は南北に長い調査区の南端部に位置する。現状での長さが580cm、幅が350cm、深さ30cmと比較的浅い溝である。溝底部は西側で標高67m33cm、東側で67m43cmであり、その比高差はわずかであるが東側が低い。内部の土壌はほぼ一枚の黒色粘土層で、炭粒が多い。

**坏蓋** (第6図12) 摘みが付く須恵器の坏蓋で口縁部は屈曲する。調整は頂部が回転ヘラケズリ、口縁部周辺は回転ナデ。頂部が平らである。口径は13.5cmである。

**坏** (第6図10, 11, 13) 須恵器の坏は3例あり、いずれも高台を有する。高台は体部と底部の境からやや内側に付く例と(10)、境付近で畳付外端部が外方に突出する例がある(11、13)。

**皿** (第6図14) 畳付外端部が突出する須恵器の皿である。内底部ナデ、その他は回転ナデ調整。口径17cm、器高2.3cmである。

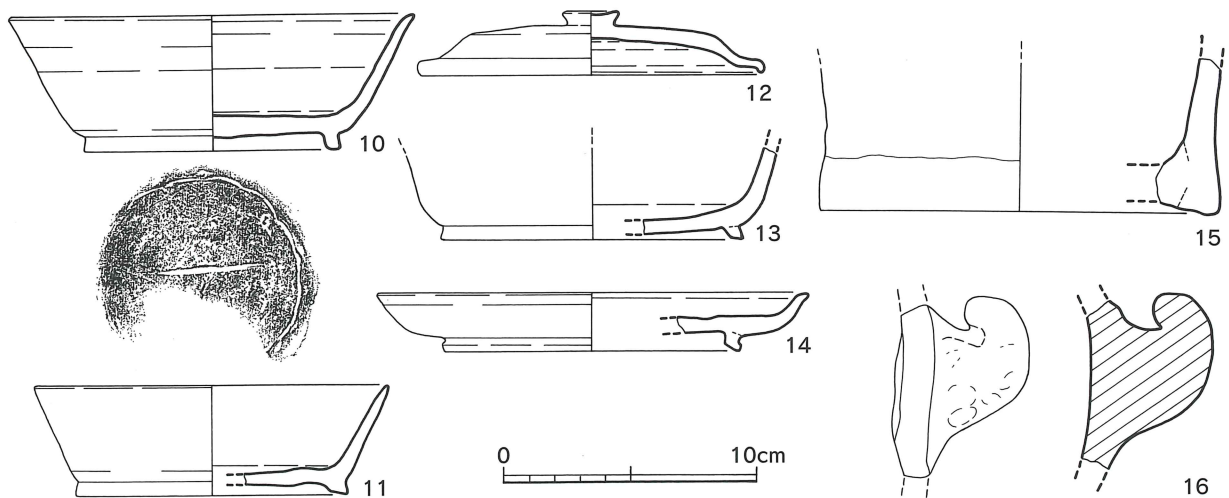
**甑** (第6図15、16) 内外面ナデ。



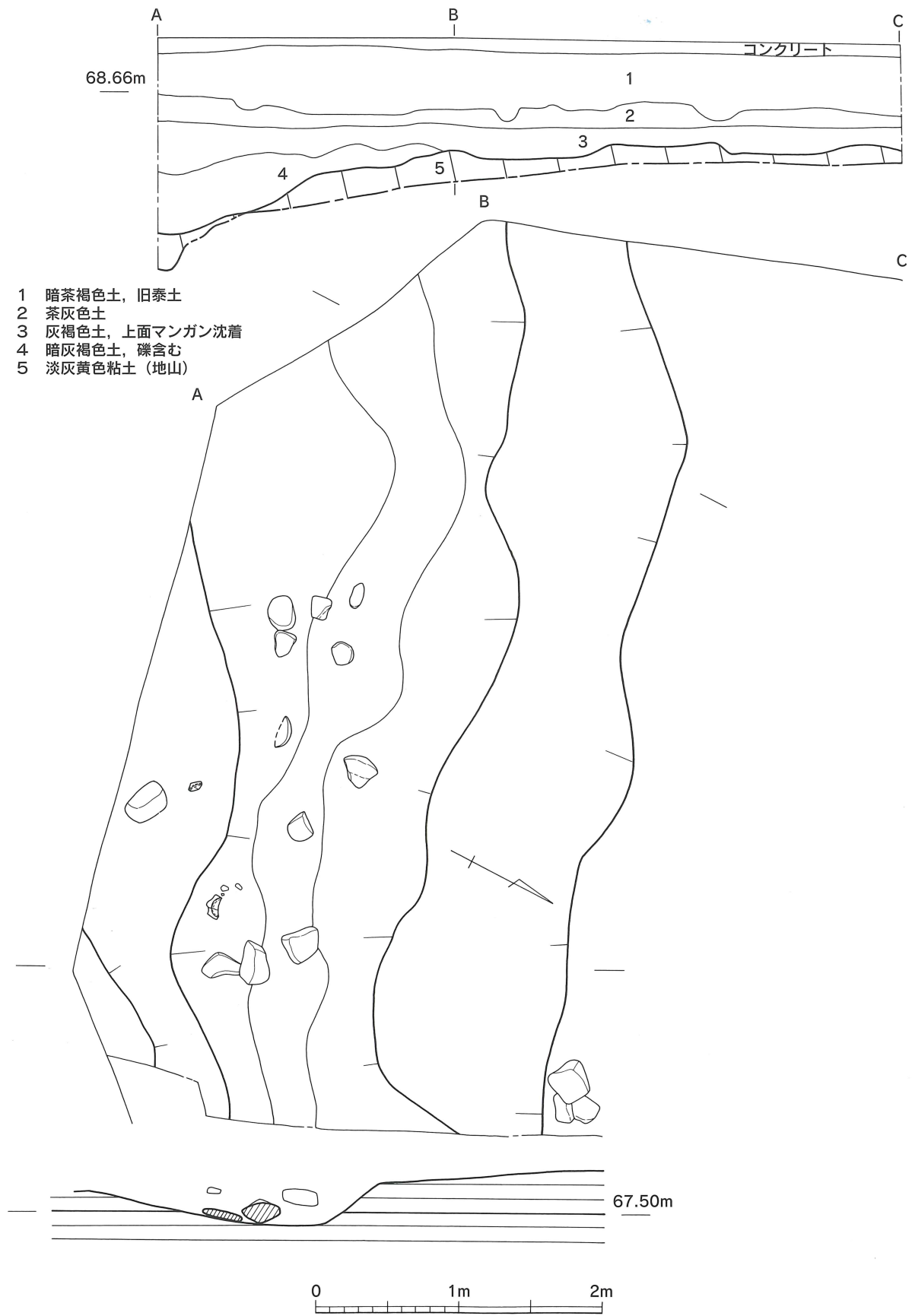
写真7 溝2全景



写真8 溝2の遺物



第6図 真木草場遺跡溝2 (S2) 出土遺物実測図



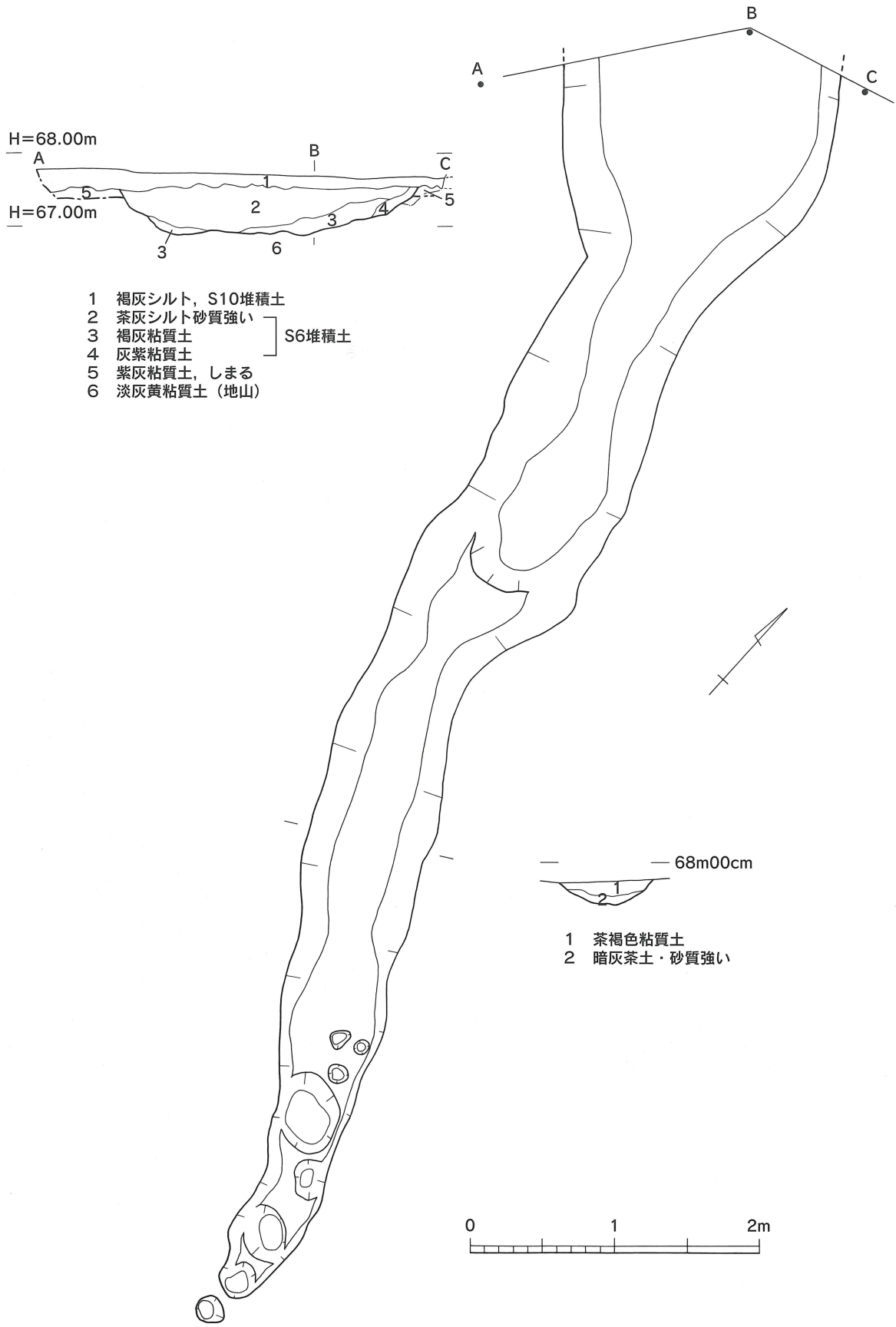
第7図 真木草場遺跡溝2 (S2) 実測図

### 第3節 溝3 (S6、第8図)

溝3は南北に長い調査区と平行するように位置する。溝底部の標高では溝の南端が低く、現状での長さが19m50cmであるが、南側になると先細り状になっている。これは溝の南方向に標高を減ずることから上部が削平されたと考えられ、本来は長く伸びていたと推定される。溝底の比高差は最大で30cmで、南側が低い。また溝の南端から12m50cmのところから幅広くなり、あたかも蛇状の平面形をなす。幅広になった場所から北側が更に広がる可能性がある。溜井状の遺構となる可能性がある。溝幅は200cm深さ80cmである。内部の土壌は黄灰色の流入土で、遺物は皆無であった。流入土の色調から、あるいは近世の遺構か。



写真9 溝3



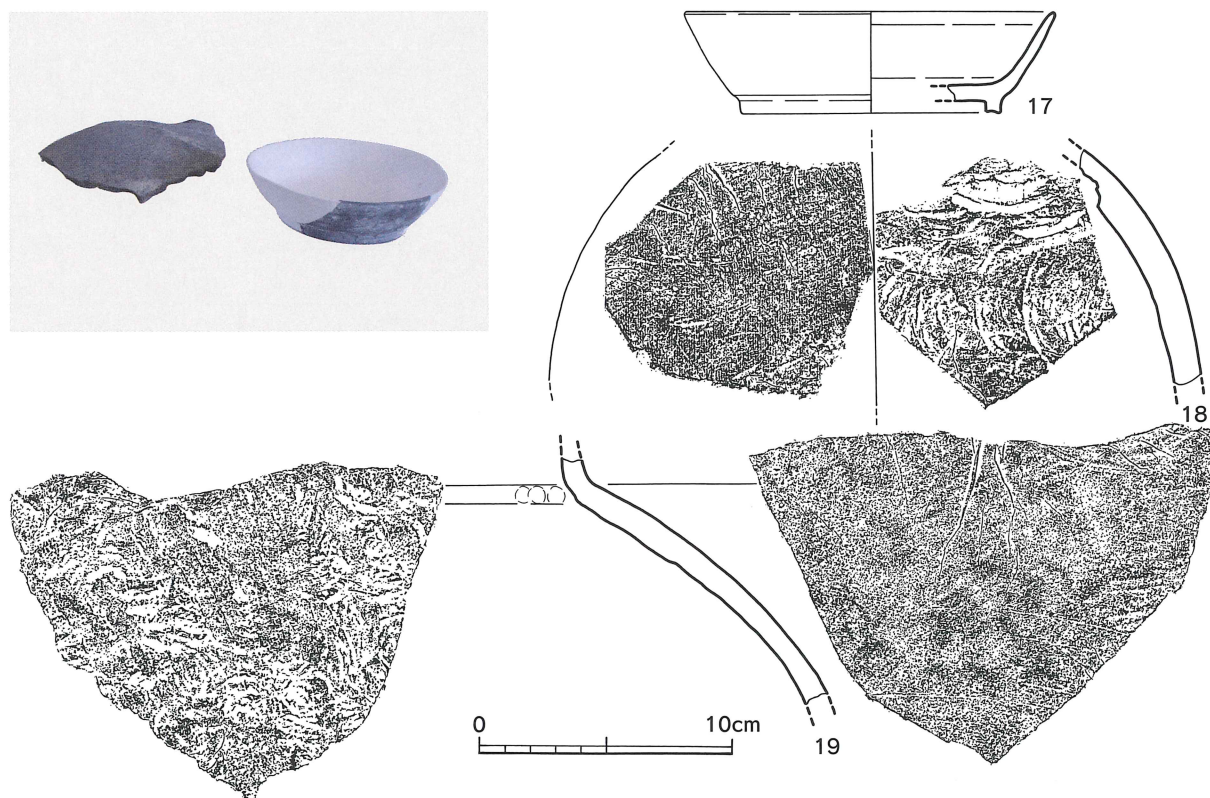
第8図 溝3 (S6) 実測図

#### 第4節 土坑1 (S1)

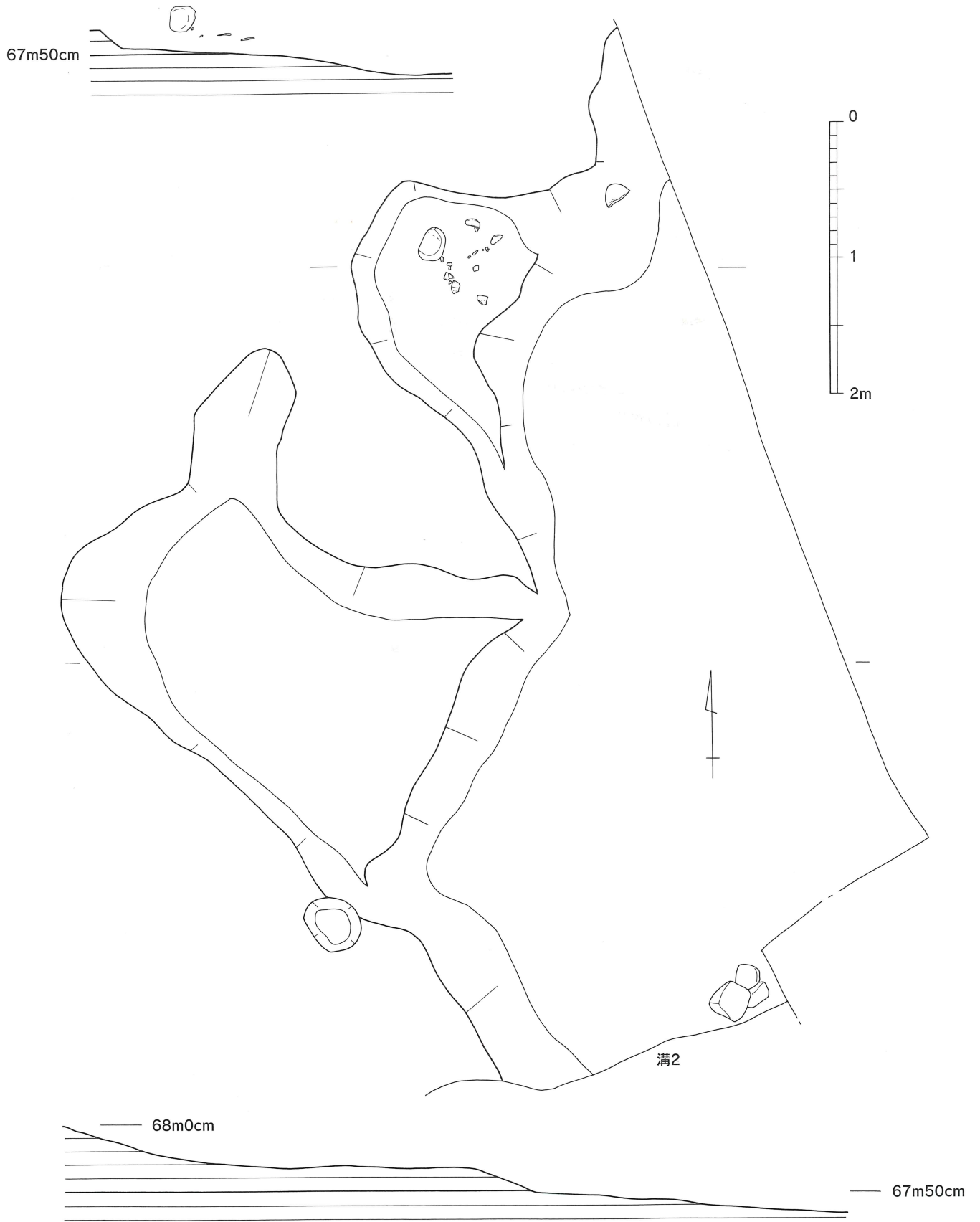
土坑1は南北に長い調査区の南端部に当たる場所に位置する。調査区の東壁及び、土坑の南側を溝2に切られる。土坑は現状で長軸7m80cm、東壁から3m90cmで立ちあがり認められる主土坑と、これに接続する浅い小土坑からなっているが、大小三つの土坑から形成されていると見るべきかも知れない(第10図)。二つの小土坑は大型土坑南側の立ち上がりの外側ラインに付く。平面形はそれぞれ不定形で、遺物は北側に位置する小土坑から須恵器の坏・甕と土師器が廃棄状態で出土した。出土状態は、小土坑の底部から10cm前後浮き上がった状態で出土した。

須恵器の坏(第9図17) 10例あり、いずれも高台を有する。高台はいずれも体部と底部の境に付、一例は断面形が方形で(2)、もう一例は畳付け部分が外端部が外方に突出する(3)。

甕(第9図18、19) いずれも胴部の張った甕の破片で、内外に叩き痕とあて具痕がある。



第9図 真木草場遺跡土坑1 (S1) 出土遺物実測図



第10図 土坑1 (S1) 実測図

## 第4章 まとめ

真木草場遺跡からは縄文時代の遺物と推定される姫島産黒曜石の小破片と中世初頭の白磁が僅かに見つかったにすぎず、他の出土遺物は須恵器や土師器等の坏・甕類が若干量であった。特に詳しい編年が知られている須恵器について特徴を述べると、坏蓋では宝珠摘みをもち、口縁部が屈曲するものとしめないものがある。いずれもくちばし状の口縁端部となっている。坏では高台が体部と底部境のやや内側に付く例と、境付近に付く例がある。これらは8世紀中葉以降、9世紀初頭頃に位置づけられている（佐藤1987）。つまり真木草場遺跡が形成されたのは8世紀中葉以降、9世紀初頭頃ということになる。

遺跡の性格をどのように考えるかであるが、資料が少なく不明な点が多い。奈良時代に宇佐八幡・弥勒寺の封戸とされたと考えられることから、この頃の田洪地区の開発に伴う集落～施設と押さえることは可能であろう。なお、1点古瓦風の丸瓦がでていますが、基本的に六郷満山寺院には瓦を葺かないので中世段階のものではない。一方、近隣の葉恩寺・向野廃寺から9世紀～10世紀の瓦がでていますが、この頃の遺物が真木草場遺跡からでていないので可能性は少ない。このようなことから9世紀以降に真木草場遺跡の瓦を位置付ける可能性は高くない。今のところ一緒に出土した須恵器の年代観からすると近隣に極小規模な古代寺院が存在した可能性もでてくる。

以上のように真木草場遺跡の性格には不明な点も多いが、奈良時代の8世紀中葉以降における田洪地区の開発に伴う遺跡として重要である。

### 参考文献

佐藤浩司1987「奈良時代の須恵器と土師器-旧豊前国を中心として」『東アジアの考古と歴史(下)-岡崎敬先生退官記念論集-』同朋社, 169～405

## 報告書抄録

ふりがな	まきくさばいせきはつちようさほうこくしよ
書名	真木草場遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第35集
編著者名	綿貫俊一
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地 TEL 097-597-5675
発行年月日	2008年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
真木草場遺跡	おおいたけんぶんごたかだし 大分県豊後高田市 おおあざまなかあざくさば 大字真中字草場	209	102193	30' 18" 1314	31' 05" 7333	2006年 7月3日 ～ 2006年 8月1日	900m <sup>2</sup>	工業用地 造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真木草場遺跡	集落	奈良時代	溝柱穴	須恵器・土師器・瓦	

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第35集

## 真木草場遺跡

平成20年 3月25日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870 - 1113 大分市大字中判田字ピアノ門1977番地  
TEL 097 - 597 - 5675  
印刷 株式会社 明文堂印刷

